

# 西南の役と玉東町



玉 東 町  
玉東町教育委員会

取材にあたって

吉次峠の戦い

木葉の戦い ①

木葉の戦い ②

戦況その他の考証

村々の風景

談話集について

古老の談話

取材を終って

## 取材にあたって

明治十年二月十五日、怒気に燃えた西郷隆盛以下の薩軍が北上を開始し、西南の役の幕は切つて落された。

あれから幾度となく秋が立ち、春がめぐりいつのまにか満百年の歳月が流れて行つた。

進発した鹿児島はその朝は五十年ぶりの大雪で南国にはめずらしく雪が吹き荒れていた。と云う

一気に踏み潰ぶさんと進撃した熊本城は谷干城以下、鎮台兵の強力な抵抗にあい薩軍は熊本の野に釘付けになつた。

薩軍は熊本城に入城するため、急ぎ南下する乃木十四連隊長以下の官軍と激突しその戦いは自然と城北の地に展開され、そこに位置する玉東町も当然のように、この激戦の渦の中に巻き込まれ村人達は多くの苦しみと犠牲を強いられた。

ずっと後世に生を受けた我々はその当時の住民の人々の苦しみや悲しみは実感としては、よくわからないが当時のその状況は親から子へ子から孫へと語り継がれ歴史は今も脈々として生き続けている。

玉東町では昨年から我が町にとつてゆかりの深いこの

西南の役を記念して町内に於ける当時の戦況、村人の生活や感情等、いろいろな角度から当時をふり返つて町の姿を再現してみようと試み、玉東の山野に伝わっている。それらの断片を勤務のあい間に出来る限り拾い集めた。

その大部分は町のおとしよりや西南の役についてくわしい人々の話をテープに収め、聞き取りにくい箇所はメモして正確に取材したつもりであるが、なにぶんにも百年前のことなので記憶違いやカン違いもなきにしもあらずと考へ、他の資料や年表等と対比しながら検討を加え、極力、主観や雑念を避けて正確を期したつもりである。

なぜなら歴史は私物ではなく公共のものであり取材にあつた我々が歴史の専門家ではないからである。

歴史は見る人の角度によつて歴史観が違うが、我々は郷土的立場に立つて住民の側からこれを見つめた。

さらに云えば今日の安定成長下に平和を 歌して暮している我々は、物質的には豊かになつたが精神的には貧しくなつたとよく云われるからである。

歴史は心のふるさとであると云う。このふるさとを訪ね、ますます遠くなる明治の我が町の姿を見つめ、ほんの少しでもいいから町の歴史の断片を拾い集めて保存しておくことが公共に従事している我々の務めでありかつ我

々自身の心の修養にもなろうかと考えこの企画を思い立ち、  
つた。

取材者

## 吉次峠の戦い

明治十年三月三日、野津鎮雄の弟である、野津道貫大佐に率いられた、支隊約千名は砲二門を引いて伊倉に向い、ここで二手に分れ、先発隊は、野辺田を経由し畑附近に現れたのは午前十時頃であつた。

一方、薩軍は立岩に布陣し、これ待ち受けた。

やがて坂門田から白木方面を経た後統部隊が到着したので官軍は兵力を倍加させ、立岩に接近し、さかんに、射撃戦を開始した。

一進一退を続け戦況に変化がないので官軍は山砲を以つて射ちまくりその援護のもとに射撃と躍進を繰り返した。

午後三時頃ようやく戦況に変化が起き、薩軍は押され気味になり立岩の陣から退く態勢になつた。

この三月三日の立岩に於ける戦いは、吉次峠の激戦のいわば前哨戦的な性格のものであつた。

この時の薩軍の本営は植木町の木留にあり田原坂から

も吉次峠からの道もこれに通ずるため、本営をここに置き、予備隊も置いて居た。

この頃、篠原国幹は本営に居たが立岩での薩軍の旗色が悪いとの報告に接したので自ら予備隊八百名を率いて急行したが立岩附近まで来ると薩軍はすでに浮足立つて居た。

砲弾は間断なく落下し薩軍陣地を吹き飛ばしている。薩軍はついに支えきれなくなりいつせいに退却した、篠原も逃げた。そして午後四時頃その後方の吉次と耳取の陣迄、退いた。

この吉次峠の戦いには熊本隊の佐々友房が薩軍に協力しているがこの日は、後方の峠の方におつた。

佐々友房の一部を守つていたが時々立岩小屋（古賀末雄宅附近）まで下つて来て警備していたと云う。

彼は去る二月二十六日熊本隊の全員にこの峠を死守し全員死のうと言つて刀で道端の楠の木を削り「敵懐隊悉く比ノ樹下ニ死ス」（原文は漢文）と大書したと云われるがその楠の木は今はない、この時、佐々友房は二十四才であつた。

この日薩軍が吉次と耳取の陣に退いた後、官軍も立岩



から退き攻撃再開の準備をしている。

明けて三月四日

薩軍の士気はあがった。小銃戦と白兵戦に突入し乱戦につぐ乱戦を重ねた。薩軍は日本刀、官軍は剣付鉄砲であったと云う。

白兵戦になると薩軍が俄然優勢で示現流独特の甲高い声を発して突撃すると官軍兵はその声を聞いただけで逃げ散ったと伝えられている。

示現流について少し調べてみよう。

薩摩の示現流という刀法は、他の地方の刀法と異り斬り込む時は両手で刀の柄を握り顔の右方にあげ剣先で天を突き上げるように構え、走りながら、猿が絶叫するよくな甲高い声を発して斬りおろす、いわば肉を斬らせて骨を斬る必殺剣法で気弱な兵士はこの声を聞いたただで腰がくだけてしまう者もあつたと云う。

この日は霧が深く小雨降っていたという。

薩軍は半高山と三の岳の中腹に兵を埋め官軍の進撃に備えた、官軍は霧を利用し薩軍を攻め立て一時は半高山を占領したが忽ち奪い返され互に一進一退の死力をつくす激戦が展開された。

この頃篠原は熊本、本営から到着した援軍数百人を二手に分け一隊は半高山から一隊を吉次公園附近から前進させ官軍を狭み込むようにして銃撃を加え六本楠までこれを押し返した。篠原は六本楠の路上で陣頭指揮をして居たが、官軍に江田と云う少佐が居て、この江田が陣頭指揮をしている篠原を見つけた。

江田は篠原が近衛司令長官だった頃の一中隊長で篠原の顔を知っていた。

江田は射撃のうまい兵を呼び篠原を狙撃させた。篠原は一発で倒れた、即死であつたと云う。

これに続いて江田も薩軍の集中射撃をあびこの時戦死した。

この日の戦闘は結局、死んだ篠原が残した作戦通り進行し官軍を追い詰め全軍を高瀬に退却せしめ吉次峠を攻めることを断念させ、以後官軍はこの峠を「地獄峠」と言つて恐れられたと云う。

この日の損失は、薩軍戦死者、三十余名、負傷者多数、官軍戦死者、五十二名負傷者百七十七名であつたと史書は語る。

篠原の死体は担架に乗せられ、六本楠から去つた。木留を経由し西郷のいる北岡神社の本営に帰つたときは、

すでに夜半であつた。

西郷は二月末の高瀬の戦いで戦死した、実弟の小兵衛が死体で帰つたとき、巨眼をしばたいて二、三度うなずき黙つて奥へ引込んだが篠原が帰つたときは死体にとりつき肥満した体を振るわせて激しく涙をこぼし、いつ迄もそばを離れなかつたと云う。

篠原の魂は今も六本楠の路傍に眼り続けている。

生前は無口で朴訥な人であつたと云われる。篠原国幹、通称冬一郎、没年四十二才であつた。

今はのどかな、この吉次峠の古戦場の風景もすっかり変り、峠の周囲はみかん園となり、晩秋には平和な黄金色の峠道になつている。その一角に当時の激戦の模様を我々に語つてくれる、佐々友房が一詩を賦した記念碑が天を突きあげるようにして立っている。

蛇足だがこの詩をつけ加えたくなつた。

君見ズヤ吉次ノ城ヨリモ険ナリ

空ヲ摩シ路峠嶮

烟ハ籠ム、高瀬河辺ノ水

風ハ捲ケ三ノ岳峰上ノ旌

一朝、警ヲ伝エ笑ツテ相待テバ

忽チ聞ク千軍万馬ノ声

硝烟 雲トナリ丸雨ト為ル

壮士ノ一命鴻毛ヨリ軽シ

呐喊ノ声ハ巨砲ニ和シテ響キ

山叫ビ、谷吼エ乾坤轟ク

砲声絶ユル処、松声寂ナリ

一輪ノ皓月、陣営を照ス

この覇気に満ちあふれた青年、友房の精神は濟々巖に受けつがれ、今も脈々として生き続けている。

## 木葉の戦い ①

明治十年二月二十二日、にわか木葉の天に戦雲がたちこめ、村人達は騒然となり人心は恐怖におのき始めた。

その夜十一時頃、植木方面での戦いから散るよう逃げてきた乃木隊の将兵の敗け戦さのひどさに木葉の村人達はおどろいた。

人夫に狩り出された村人達が焚き出した握り飯を食う

將兵もいるが疲れてそのまま民家にもぐり込み倒れるように眠った將兵もいた。

その頃、村人達はほとんど避難し、家はほとんど空屋になっていった。

明けて二十三日、午前八時三〇分頃偵察に出ている、乃木隊の將兵が「賊だ、賊だ」と叫びながら薩軍に追われて逃げ帰った。

木葉に於ける一回目の戦いはこうして始まっている。

この日は雲が厚く一度も陽が射すことなく寒い日であったと云う。

この時、

第三大隊

長吉松少

佐は馬上、

上木葉の

路上にお

り連隊長

の乃木少

佐は、役

場の北側

の高台に本營を構えていた。



有栖川宮督願の跡

吉松は本道上とその左右に兵を伏せてある。

境木附近に現れた、薩軍は、猪鼻天神を中心にしてその左右に兵を伏せた、勢力は薩軍約六〇〇、官軍約一〇〇〇名であった。

やがていつせいに進撃を開始し、上木葉において猛烈な射撃戦に突入し、そのまま一進一退を続けた

この木葉での戦闘状況を変えたのは午后一時頃薩軍の別動隊約六〇〇名が木葉山の裏側から現れてからである。

この別動隊は山上から乃木の諸隊に向けていつせいに銃弾の雨をそそいだ。

この背面に現れた薩軍に驚いた乃木隊は一種のバニック状態におちいった。

薩軍の圧迫に苦戦を続けた吉松はこの時、役場の西側の通様どんばら石塔附近におりすでに馬上どころでなく徒歩で指揮をとった。

一方薩軍は間断なく射撃を続けながら機を見ては特意の斬り込みを繰り返した。

この圧迫に耐えかねた吉松は乃木少佐に援兵を求めたが、乃木にも援兵を出す余裕はなかった。

その後、吉松少佐は決死隊二〇余人を募り薩軍に対し銃剣突撃を敢行し見事な戦死をとげたという。

吉松少佐の横顔を見てみよう。

吉松秀枝は土佐人である。高知城下、下本町で生を受けた。

幕末の風雲児、坂本竜馬の生家のそばであった。

文久三年土佐藩兵として上洛、志士活動をした。当時速之助といつた。戊辰の役では鳥羽伏見の

戦いに参加した優秀な戦斗指揮官でその後、関東から、会津へ転戦し、明治四年、近衛兵の創設と同時に大尉になり明治九年、少佐に進級した、彼は生前「俺が戦死したら、軍服の正装を以って葬ってくれ」と部下に遺言している。しかし彼が死んだ時、正装が手元になかったため、遺言どおり履行出来ずやむなく外套を着せて大きな、



吉松小佐負傷の場所

かめに収められた。没年三十四才であった。戦後、彼の遺族が高知旧城下の福井村の村社の前に別に墓を立てた。吉松少佐の子孫は現在千葉県銚子市におられる。

この俊傑の英霊は宇蘇浦に眠りその墓石は今も靈雨の山風にさらされている。

吉松少佐が戦死して乃木は退却を決意した。乃木少佐は前線を去って稲佐に向つて退き始めた。稲佐には包帯所や炊事場があった。乃木少佐に付添つたのは、稲佐の人夫を主体とした四十名余りの一団であった。この人夫達に殿軍を務めさせている。乃木少佐



仮包帯所跡

が頼みとした人夫達は彼らの前に突然現れた薩軍の白刃を目の前に見るや悲鳴をあげて乱れ、西へ向って逃げ始めた。

この悲鳴が引金になって木葉の前線にいる官軍の士卒達をパニック状態におとしいれた。官軍の将兵達は、薩軍が後方に廻ったことを知りたちまち潰乱した銃を打ち捨てて逃げ出す者が多かつた。

あとで薩軍が捨てた獲物はスナドル銃三百六〇挺、弾薬数万発、西洋鞍を置いた馬一頭となつてゐる。

乃木少佐はこの時、稲佐の官の前におり人夫達の大潰乱に巻き込まれた。

乃木が乗っていた馬は主を失つた、吉松少佐の乗馬であつた。

その馬に銃弾が当たり薩軍に向つて暴走したので乃木少佐はふり落さ



乃木少佐落馬の跡

れた。

薩兵は馬から落ちた相手が敵将と見たので生捕りにするため駆けて来た。

一人の薩兵が落ちた乃木少佐を斬ろうとしたとき大橋という伍長が乃木の前に立ちふさがつたため大橋伍長が乃木少佐の身替りに斬られ一刀で絶命したというから薩摩現流の凄味がうかがえる。

さらにその薩兵はつぎの太刀をふりおろしたが乃木少佐が、間一発身をかわしたためきつ先が松の木を切り付けた。

乃木のそばに摺沢という少尉補がいた摺沢は乃木を逃がすためとつさにその場の兵、数人で殿戦をして負傷した。

乃木少佐は九死に一生を得て潰兵と共に徒歩で走り木葉川を渡つて西へのがれ寺田に退却した。

この頃にはすでにあたりはうす暗く氷雨が降つていたという。

この二十三日の戦いに於ける損失は官軍戦死者二十二名負傷者四十九名であり一方薩軍の戦死者四名負傷者八名であつたと史書は語つてゐる。



## 木葉の戦い ②

明治十年三月三日、高瀬の戦いに於て勝利を収めた、官軍が再び行動を開始した。

総指揮官、野津鎮雄はこの日、二個旅団の将兵を二手に分け本隊を田原坂へ、支隊を吉次峠へ向つて進発させた。

本隊は木葉の地理に明るい乃木隊を先鋒とし午前五時頃迫間川左岸に集結し安楽寺を経由して田原坂を目ざして進撃を開始した、兵力、野津鎮雄少将以下四千三〇〇名であつた。

この時、乃木少佐はいない。高瀬の戦いで負傷し久留米に後送されていた。

一方薩軍の主力は田原坂を守つて居たがその前衛軍が砲二門を引いて木葉に布陣し、官軍の到来を待ち受けた。

薩軍の将は、別府普介である。ついでながら別府は桐野利秋とは従弟にあたる。

別府隊は木葉山の中腹に一門を据え一門を稻佐の高台に据えた。

七時頃官軍は稻佐附近に現れた、薩軍の砲が発射音をあげ、木葉に於ける第二回目の戦闘が始つた。

この時の木葉村は田原坂の薩軍本陣にとつて、いわば前哨陣地に当たり官軍の進撃をここで食い止め進撃をおくらせ、田原坂での築陣工事に必要な時間を木葉で稼ぎ出すことにその目的があつた。

それ故に、木葉における薩軍は強力を以つて鳴る、加治木兵<sup>へ</sup>と伝われる、勇猛な郷土軍をこれに当てた。

この日、夕方迄射撃戦と白兵戦を繰り返し、陽が西に傾く頃、薩軍は木葉を明け渡し、田原坂へと退いて行つた。

その後木葉は官軍の占領地となり翌日からの田原坂の激戦へとつながつていたのである。

## 戦況、その他の考証

百年前の戦闘状況や村々の生活、経済そして村人達の生活状態や庶民感情を現在に投影させ、それを再現する作業はむずかしい。

歴史や、郷土史の専門の人々なら、豊かな知識と経験に基いてそれを再現し文章化、もしくは図上に落して書き表わすことが出来るが門外人の我々が勤務のあい間にそれをやることはめくら蛇的な冒険であつたかも知れない。

しかし、この町に育ち、この町を基盤にして暮らしている我々が郷土史的観点に立ち、西南の役後、百周年に際して、自分達の町の過去の出来事に限定し、これを調べ何かを作り出すことは決して無意味なものではないと考へあえてこれと取組んだ。

取組みに際しては町の古老や町の伝承ばなしを基礎としたほか「薩南血涙史」をはじめ毎日新聞に連載された「翔ぶが如く」および大牟田市の郷土史家石岡玉波、山

下郁夫両氏の共著による「田原坂の激斗」「日本歴史物語」ほか多数を参考文献としてこの作業を進めた。

まして激斗状況のような流動的なものは戦場の経験もない私がこれを表現するのは正直いつて頭の痛い作業であつた、が当時の状況に近づくためには、こんな方法しかなかつたと思つている。

史実の精度をあげるには大型の土木機械で荒く掘り起してはならないと云われる。

素人ばかりではあつたが我々は移植ごてで丹念に掘つたつもりである。

## 村々の風景

「勝てば官軍、敗ければ賊軍」といわれる。

選挙ではなく墓のことを思い出した。

西南の役に於ける官軍の死者は我が町においても高月、宇蘇浦と立派な官軍墓地があるが薩軍墓地と云われるものはない。

薩軍戦死者のそれは、みかん園の片隅か藪の中にひっそりと立ち、今も無縁仏となつて町のあちこちに忘れら

れたまま永い風雪にさらされてゐる。

戦争に負け、た人間は死んでからも差別されているように哀れみを感じる。

町の古老の口から出る言葉のはしばしにも官軍、賊軍という表現でそれは表われるがどういふ訳かその大部分は賊軍に好意的でどうも官軍は旗色が悪い。

なぜかと思ひ調べてみるとどうやら次のような事情に原因があるらしい。

当時、戦場にされた村人達こそ災難であつた。

戦いが始まると村人達は家財を持出し山へ逃げたり親類をたよつて避難した。家を焼かれるからである。

民家が敵の砦にならぬよう、これに放火するのは戦国以来の日本の合戦の常識であつた。しかし薩軍は例外を除き原則としてこれをしなかつた。西郷隆盛がこれをきらつた。

薩軍は民のための軍隊であるというのがその思想である。

しかし官軍の体質は違つてゐる、民を見下す思想が濃厚にありそのことは官軍を派遣した太政官、そのものの体質でもあつた。

だからこの戦いに於ても官軍に焼かれた家が圧倒的に多い。

戦争で家を焼かれ山へ逃げたり豪の中で不自由な生活を強いられた村人達がそのことはよく知つてゐる。だから官軍をうらみ薩軍の勝利をひそかに願う人々が多かつた。また彼らの指導的立場にある民権派の熊本士族が圧倒的に薩軍びいきであつたことも一つの原因である。

経済的にも苦しい生活を強いられた。

その前の江戸期よりこの時代はずつと苦しい生活をしてゐる。

新政府は欧米並みの近代国家建設をめざし資本主義の基礎もできないまま、それを推進させ鉄道も敷き、郵便制度も設け、学校教育も与え、土農工商という制度こそ撤廃したが依然として下々の庶民にとっては護民思想というものではなく数百年なじんだ江戸期の生活から急激に変化した新政府の方針に、とまどうだけであつた。

さらに廃藩置県によつて全国的に失業士族があふれ経済状態は極度に悪く我が町に於ても例外ではなかつた。

租税も当然納めなくてはならないが農村では維新までは租税は米が主な貨幣であつたが明治六年に新政府はこれを金で納めさせる金納制度にした、ためそのことの混乱と反発が当然農民のあいだにまき起つて経済生活はもちろん心理的にどのように暮らしたらしいのかわからな

かつた。

そういう状態のもとに薩軍が村々に入つて来て「三年間は年貢はいらんぞ」と云えば素朴な農民は薩軍の方が自分達にとって同情的な政府になるのではないかと期待したふしがある。

「賊様おかげで年貢も皆無か」と唄われたのもこの当時の農民の気持が表われている。

さらに戸長（村長）という制度が現われたのもその原因の一つであつた。

戸長制度は維新政府がとつた他に類をみない独特な制度で農民はこの制度に激しく反発した。

戸長はその前の江戸期にあつた庄屋に仕事こそ似ているが本質的に違う。

江戸期には村々の自治的な行政の責任は庄屋が無給で請け負ひむしろ自分の金を持出す方が多かつた。

維新の太政官政権は県庁を通じて村々のすみずみまで国家権力を及ぼすため戸長を官選にし行政を行った。

このため戸長の中には農民を「土民」と見る感覚がありそのほとんどは官僚主義的な士族がこれを担当した。

戸長は給料制である。その給料は村人からの徴収金でまかなわれた。

太政官国家は村の公共事業も村費でまかなわせた。

この官選戸長は当時の農民にとって全くのきらわれもの存在であつた。

正規の徴収金のほかに何かにつけては寄付金という徴収金を集めた、このことはただでさえ現金収入の少い村人達にとって油粕から、さらに油をしぼられるようになってつかつたという。

このような太政官国家が農民にかけてきた経済的重圧が農民の気持を薩軍に近寄せている。

またこの戦役が誘発させたように明治十年には農民一揆や打ちこわしが熊本一円において連発している。

その当時「役と名の付くものは効薬でも打ちこわせ」という合言葉のもとに打ちこわしが流行しているのも熊本県におけるそういう庶民の気持が維新政府の行政に対して爆発したと云われる。

我が町の村民達に同情された敗けた賊軍の溜飲が下がつたかどうかは知らない。

## 談話集について

ここに、この取材にあたつて当時の町の姿を語つていただいた人々の談話を載せる。

この談話は、二月二十三日、官軍が木葉の戦いにおいて薩軍に撃退され高瀬方面に退却した日、そして退却した官軍が野津鎮雄らの援軍と合流、再び勢力を盛り返し、三月三日にその官軍を本隊と支隊に分け、本隊を田原坂へ、支隊を吉次峠へ進発せしめた日、および旧木葉村が田原坂の後方基地になつた時の様子が混同して語つてあるがその当時の村人達の立場生活状況、そして庶民感情といったものがにじみ出ている郷土史的な貴重な談話であると思われる。

その中には史実と対比してやや飛躍気味な談話もないではないがそれはそれで当時の庶民感情のあらわれの一端であると思つて載せた。

談話には官軍の将兵の死体には寄つてたかつて尿ゆばりをかけ感情を爆発させ、薩軍の負傷兵には、食事を持つて行

きそれを食べさせている、玉東の村人の姿が手にとるよりにわかつて興味深い。

また、人夫に狩り出された村人達が田原坂の戦いに出陣する官軍將兵に対し歌つたり踊つたりして見送つてゐる姿や、木葉川の水が焚き出した時の米の研ぎ汁でまっ白になつた話等、どれもこれも郷土史的価値のある談話ばかりであつた。

古来、庶民は時々の政治、経済に対し非常に敏感であつた。

我が町が官薩兩軍によつて踏み荒された時もその時の力学的状況に身をゆだね、したたかに生きる雑草のように生きた。

この談話もそんな雑草のように生きて今まで伝えられた。

ほんの少しではあるがこの雑草の種を枯らさずに大切に保存し後世へ伝えなくてはいけないと思ひこの談話集を作つた。

玉東町大字原倉本村 本 田 末 彦 八十八才

この部落にはその当時、三十戸ばかりの民家があつたが賊軍が来る二、三日前に官軍が全部、焼いてしまつた。



あらかじめ知らせてあったので家財道具は全部近くの畑に出して積んでいたが、その日その日の生活は大変苦勞していた。

この附近の戦斗は非常に激しかったらしく特に賊軍の抜刀隊には官軍は苦勞していた。

この戦争の後にこの部落の人達は家を建てたが建築材は附近の官山から立派な木を切ってきてそれで家を建てた。

官山の木を切る許可があつたわけではないが役人もおめにみていたらしく立派な材木が手に入った。

玉東町稲佐

井上タキ 九十一才

明治十年の戦役では地元の人達は相当苦勞したそうです。

稲佐の部落は高瀬方面から田原坂攻撃の際の通り道であつたのでこの部落の民家が邪魔になるので夜、ひそかに梅林から稲佐に通ずる水路を通つて民家に放火したので、ほとんど焼失してしまい、二、三戸が残つただけだつた。住民は何一つ持ち出す時間もなく体一つで逃げ出した。

女は腰巻一つで逃げた人もあり着替えなど、何一つな

く非常に困つた。親類の人達が見かねて着替えや食糧を待つて来てくれた、また入浴も

出来ないのでシ

ラミがわき、か

ゆくて仕方がな

いのでシラミ取

りが毎日一つの

日課だつた。

私の家で焼け

残つたのは仏様

と木製の火鉢だ

けだつたので大

事に保存してお

ります。

仏様は逃げる

時これだけとは思つて身に付け護つていたものです。

玉東町上木葉

藤山文治

八十五才

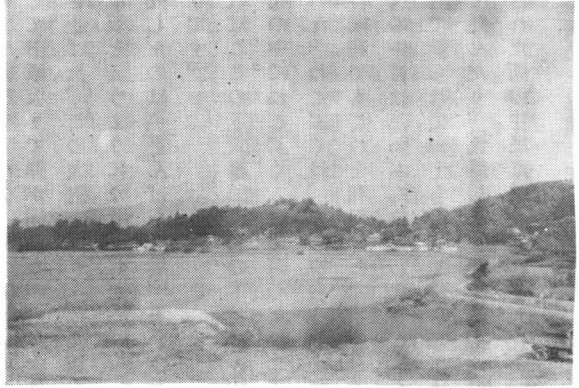
官軍の本営は高田宅（現在空屋）でした。そこには山県有朋が居たので山県の書が沢山あつた。



稲佐 西南役の焼け残り家

高田宅の裏  
が大城戸時宗  
の家で有栖川  
宮は、そこに  
居られた。今  
の大城戸春雄  
君の家がそれ  
です。

ある日、附  
近の百姓が馬  
小屋の下肥を  
あげて推肥積  
みをしている  
と宮さんが、  
「それは何を  
するのか」と聞かれたのでこれを作つて肥料にしないと  
米が穫れませんと申し上げると宮さんは「そうかそうか  
それでは」と云われて肥積みをして踏まれたそうです。  
官軍が分宿している家の者には全部鑑札を渡してあり  
その鑑札がないと家の中に入れなかつた。密偵を防ぐた  
めそうしてあつた。ある時、おやじが外出して家に入る



梅村から稲佐に通ずる水路，この水路を通して  
放火した

りとするど鑑札を見せると云う、丁度、鑑札を忘れていた  
たのでとうとう家へ入れてくれなかつた。仕方なく家の  
上の畑に登つた処、そこで兵隊達が酒盛りをしていた。  
「お前も飲め」と云つて無理に酒をすすめ串に差したさ  
かなをくれたので「これは何というさかなですか」と聞  
くと、「これは賊と云う肴だ」というので恐ろしくなつ  
たので逃げ出した。

伊形靈雨さんの墓の下の段に剣道の達人であつた早木  
さん（薩軍に参加）の墓があるが、その早木さんが官軍  
に捕えられて縄で縛られたが番人が火を焚き居眠りをし  
ていたのでその隙を見て焚木の燃え残りて縄を焼き切り  
その木で  
番人の頭  
を殴つて  
逃げる途  
中、官軍  
の兵隊が  
剣を抜い  
て投げた  
のが足に  
刺さつた



早木先生の墓

がやつと逃げきり、私の生家（大城寺の現在の田畑茂男宅）の小屋の二階に逃げ込んだが下の方には官軍が居るし、食事や飲み水を早木さんに、やるのに非常に苦労したそうです。

大城寺の山の上には大砲を据えた台場が今も残っているがそこに台場を移したのは、当初、有栖川官の督戦碑の立っている高台から田原坂を射撃したが猪の鼻天神の松の大木が邪魔して田原坂まで弾が届かないので大砲をこの台場まで引き上げた、この大砲を引き上げた坂をこの附近の人々は車坂と云うようになりました。

吉松少佐が戦死したのは「どんばら石塔」という墓がある所だったそうです。

この附近の百姓はこの下（藤山氏宅の下）の小川に逃げ豪の中や小川の中にねこぶく（縄で編んだむしろ）を張って隠れていた。ねこぶくは、ゆらゆらゆれて弾が貫通しないので各家庭でもこれを利用した。

この附近の住民の中にはだいたいぶん負傷した者が居た。前田ぢいさんが刀で斬られて一生ちんばで暮らしていた。このように戦争で死んだり、負傷した一般住民も大勢いた様だ、戦場にされた所の住民は誠に哀れでした。

玉東町大字山口

松 永 弥 平 八十才

明治十年の戦役当時は私の父は十七才だった。その頃薩軍は食糧が不足していたので村の若い者で元

気のよい者に刀を腰に差させて、各家を案内させながら清物を出せといい乍ら徴発していた。祖父はあまりうるさいので山の中に隠れていたので祖母が仕事に行くようにして食糧を運

んでいた。又非常に危険であつたので山の中や、

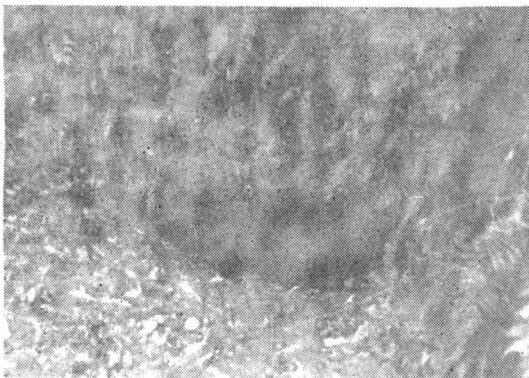
平地では豪を堀り竹を編んで豪

の上に乗せ、その上からねこぶ

く（縄で編んだむしろ）を乗せ、

その上に土を覆い危険を避けて

いた。薩軍は「おまんどんな、



隠れた壕

こげんとこにおつとか」と言っていた。

そのうちに官軍がこの部落を占領した、官軍は各家に二、三人宛宿泊させていた由、収容しきれないので久保田の川原に仮小屋を数ヶ所に建てて宿泊していた。

小倉方面から来た兵は長い間の行軍で足には豆ができて靴をはいていた者は殆んどなく草鞋をはいていた、非常に疲労して戦さのできる状態ではなかった。見るも哀れであつた。

この附近（山口部落）が丁度、横平山、吉次峠、田原坂の戦斗の兵たん地で兵隊が大勢いたので焼かれずに済んだと思う。

兵隊を賭うのに人夫が足りないので此の部落の人達は全部かり出されていた、そうして握飯をつくつたり、負傷者を運んだりさせられた。

米を毎日何十俵と久保田川で洗うので川の水が真白くなっていた。米を洗うのも非常に雑で附近には随分米が落ちていたので夜ひそかに拾いに行つて持ち帰り、ごみ、砂等をとりに除き、米の飯を喰つたと喜んでいた（その当時は米の飯を喰うのは珍しかった）そうして此処から兵隊が繰返し出陣して行つた。出陣の際は部落の人達が歌つたり、踊つたりして励ましていた。その頃は毎日夜も

昼も豆をいるような音が絶え間なく聞えていた。

官軍は権現山から攻められ非常に苦しい経験があるので権現山の下方の前平という山（約五町歩）は全部放火して焼いてしまつた、これは薩軍の隠れ場所がないようにするためである。

大正の時代になつて、その当時焼け残つた松の大木を切り白にしようとしたが、火事に逢つた部分が黒い炭のようになつていて使用できなかつた。

玉東町大字上木葉 田畑茂雄 八十五才

私の家の仏壇の引出しの引手の処に弾丸が入つたまま使用しておりませんが、これは附近の山にあつた杉を切つたところ弾丸が入つていたので記念にすると同時に仏壇の引出しに使用すれば仏も浮かばれると思つて使つております。

この左手に山があるが、この山の頂上附近で両軍が衝突して切り合いをして両方共三人づつ戦死した。

私の家の近所に田辺正八という者がいたが、片足が小

さく、びっこしていた。原因は流れ弾丸に当り負傷して不具者になっていた。

大本營のあつた高田家の源蔵さんという人は偉い人で官軍の高官と話しておくれた。自分は「バッチヨ笠」をかぶり戦場の模様を詳しく説明して重宝がられていた。

天草に「バクチ」打ちに行き、予め船頭を買収しておいて、勝ったら逃げて帰る用意をしていた。仲々の知恵

者で掛引も強く金儲も上手だったらしい、勝逃げすると相手が追ってくるので追手を遅らすために道路に金をばらまいて逃げて来たという話もある。

戦役中は女性が非常に苦労したらしい。

兵隊が女を見



西南の役当時住民が隠れた壕

ると、悪さをするので女の人は出来るだけ姿を見せないようにしていた。未婚者も「オハグロ」をつけて既婚者の様な風をしていた。



玉東町大字原倉

中山 昭正 六十四才  
大隅 次雄 六十二才

私達の立岩部落は明治十年の戦役当時四十数戸在ったが、この戦役で殆んど官軍に全部焼かれてしまった。残ったのは唯一戸で清田という庄屋さんの家だけだった。予告して焼いた家には相当の補償をしたらしい、家を焼かれた住民は全部住む家がないので、山の中に豪を掘って生活をしていたが、生活は非常に苦しい毎日であった。

この部落の上方に高台があるが、そこには薩軍の砲兵陣地の跡で記念碑が建っている。

第一大隊長であった篠原国幹の戦死の跡に碑が建っている、遺族は現在東京に住んでおられ今年の一月頃家族四、五人で墓参に來られた、碑を見て戦死の日が一日違うと言っておられた。

この部落の人達は殆んど使役に出ている、私の祖父も使役に出て敵情偵察を命ぜられ、偵察して帰り大きな声を敵はおらん、おらんとやうと声大きい小さい声で言えとしかられた。

この部落に居た薩軍は食糧難におちいり非常に困って

いた様子であったので部落の者は握飯を売りに行って金儲をしていた、物売りに行った人や密偵に使われた人中には大分殺された者もいた。

薩軍の志気は旺盛で特に抜刀隊の活躍はものすごく、官軍の陣地に突入してバッサバッサとなぎ倒していた、官軍はこの抜刀隊におそれをなして抜刀隊を見ると一もくさんに逃げていた。

吉次峠の西方約五百米地点に番どころという場所があるが、その当時は番所であって吉次往還の重要な役目を果たしていた所らしい、この吉次往還は今でもその一部が残っているが、石畳にして立派な道路であった。

私が子供の頃第六師団が難路行軍の演習に來たが車輛が登らず、吉次峠を越えるのに三日間がかりで非常に苦労をした。この時師団長が現在の新兵器で護つてもこの地を落とすことは極めて困難である、自然の要塞を呈し天下の險の名にふさわしい場所である、と。

この部落に清田という庄屋がいて豪盛を極め何時も五、六人の下男、下女が居た。師走ともなれば年貢を納めに牛馬を引いた人達が列をなしていた。

その当時は造り酒屋もあって相当栄えていた処である、この戦役で大分金儲をした人もある様だ、官軍や薩軍が

退却したり進撃したりすると直に現場に行つて金品を拾い集めたりしていた。

現在この付近は密柑畑になつてゐるが、その畑の片すみ石を積み重ね花や、線香をあげている処があるが、これは薩軍の墓地と云い伝えられ地主が供養してゐるものである。此の地は以前は粟畑であつたが畑の真中に土俵を築き数日間相撲が開かれ近郷近在から人が集つて賑わつてゐた。

玉東町大字原倉

菅本茂雄 六十四才

この附近の戦で一番激しかったのは、官軍が畑<sup>さ</sup>下り山線に陣地を構え薩軍が吉次一立岩線に陣をしき戦闘が行われた戦であつた。当時畑在の土族に河田、佐分利という二人の大地主が居て、その二人が薩軍の佐佐隊に加担した。

此の二人の者が道を通る時は一般の百姓は道の両側に土下座してゐたという。

菅谷の上方に仁平笹という処があつて其処は谷になつていて、石のこけらがあり戦争中は住民の避難所になつてゐた、父が六才位の時でかすかに記憶してゐたのであ

る。吉田次郎作という人が十七才で薩軍の入夫に雇われ薩軍の或る死体を木留を経由して本営まで「タンカ」で運んだ、その人は鼻髪をはやしてゐた、薩軍の中を通るときは皆んな鄭重に見送つてゐたのをみると相当偉い人だつたらしい、確かなことは判らないが、六本桶で戦死した篠原国幹ではないかと云つてゐた。

当時原倉西の畑と云う部落に源六さんという人が居たが夫婦喧嘩して原倉東の本村の実家に帰る途中薩軍に捕えられ木に縄りつけられて殺されてゐた。たぶん密偵の疑いで無惨な目にあつたらしい。その頃は、このような事件は相當の数にのぼるものと思われ、戦争中薩軍が駐屯した部落は、薩軍が移動する時は放火して焼いてしまつた。

菅の谷、山口には官軍が居たので焼けなかつた。畑には薩軍が居たが、河田、佐分利両氏が薩軍に加担してゐたので二人が薩軍に頼んだので全部の民家は火災から免がれた、従つて立岩、本村は全部焼かれたので、その地方には明治十年前の家は全くない、散々な目にあつたものである、吉次、半高山には当時の大木が、うっ蒼と繁つてゐた、この松は加藤清正が朝鮮から帰る時持つて来た朝鮮松で枝付きが違つてゐた、清正が重要な処として注

目していたらしい。

河田屋敷は今も残っている、藤本の住んで居る処である今でも七面大明神が祭つてある。

佐分利勘十郎は両股を射たれて歩けないのでいざつていた。

河田は戦後刑務所に入れられ六ヶ月位して帰つて来た、河田の子孫は現在熊本市に在住し、市会議員、熊本日日新聞にも永く関係していた。

明治十年前までは、この附近の人達は手習いに行つていた、人々は御屋敷と云つていた、百石取りの大地主であつたらしい、（現在井上左門の居る場所である）

槍術の達人で指南もしていた。

玉東町大字白木 平 井 九 平 八十四才

谷村計介が高瀬の官軍に連絡をとり再び戦闘に参加し木葉の横町で水を飲ましてくれといつて来たので店の奥さんが柄杓に吸んでやったところ、それを飲んで柄杓を返そうとすると、柄杓の先がボトリと落ちた、計介さんは有難うと云つて二、三歩行くと流れ弾丸にあたつて戦死した。その当時本當は木葉の横町の菊屋という処に

あつた、その後二俣に移された。

それから賊軍の一人が逃げ遅れて上古閑に居たので、このままにしておくで官軍に知られては放火され全部落の家が焼かれるので二俣方面に逃がしたので、火災からは免がれたが、その当時の住民はともあわれであつた、話にならない程みじめな生活だつたらしい。

戦死者の処理の状況を、祖父が言つていたが、高月の官軍墓地に塹壕を掘つて、そこにどんどん埋めて赤いケツトを覆せてその上に名札を書いて立てていた。

玉東町大字上木葉 藤 山 常次郎 八十五才

明治十年の戦役の時は私達の家は今の境木部落の東北の斜面に一部落があつた。そこに田尻俊男の先祖が居たが、その兄が流れ弾丸にあつて死んだ。

祖父は夫方にとられ屋は鶏殺しが仕事だつた、夜は寝る暇もない忙しさであつたので閣下（乃木少佐）に仕事を覚えて貰つた。瓜生田の本陣に土囊を頭の高さより高く積み上げ内側に「ねこぶく」を張つて乃木さんが、その中に入り土囊の隙間から望遠鏡で戦況を見ていた。

「閣下」御飯ですと云つてやかに赤酒を入れ、鶏肉や

魚を持って行くと「うんそこに置け」という。

閣下が東京抜刀隊に「戦闘の準備をせ」という、どうするかと思うと日本刀を「ば板」の先に結び付けて、薙刀のように作っていた、準備が終ると、飲ませ喰せしてから「第一抜刀隊切り込め」と号令をかけると、一斉に突入していった。薩軍は不意をつかれて退却した、部下が「閣下見事にやりました」と報告すると「うん、御苦労」と云われた。

その突入の時の有様は後鉢巻に二重のわらじをはいていた。第二回目は薩軍が充分準備していたので切込隊は散々に切り殺された、特に若手の十七才位の青年が日本刀で右に左に切りまくられ見事なものであった、部下が閣下失敗しましたという「何たることか」としかられた。

境木（田原坂の登り口）眠がね橋の側の水田は食糧置場で握飯しが山のように積んであった。又一方には草鞋が山のように積んであった、そこで飲んだり喰ったりして田原坂を攻撃していた。

瓜生田に行くとも肉を焼いて喰っていた。「お前も喰はんか」と言うたが、人間の肉のようであったので喰はなかつた。

大きな肉を油をじゅうじゅういわせながら焼いていた人間を喰うと度胸がつくといつて「人を喰うというてね」といつていた、贅沢だったと思つたのは、死んだ鶏は官軍は喰わずに捨てていたので附近の百姓は、奪い合つて拾っていた。

官軍は大砲が不足するので松の木を二つに割つて、それをくり抜いて二つ合せて竹の輪でしぼり、火薬を中にに入れて打つた。瓜生田から田原坂を射つたが弾は田原坂に届かず下方の鉄道を越えて中久保の土手にあつて「どーん」と音をたてて破烈していた。

薩軍も小銃が少なく弾丸も少ないので一発必中の狙い射ちしたので命中率はよかつた。

一方官軍は一人三百発射たないと休憩できないのでめくら射ちであつた。

西郷さんは城山で死んだことになっているが、実際は明治十年には死んでいない、城山で負傷すると十年先を見ないと死ねないと云つて支那の上海に逃げた。そうして明治二十年に帰り西郷の従弟が斬つた。それまでは墓だけであつた。

私が小学二年の時、学校の先生が、西南の役の唄を覚えていたが今も憶えている。

すいせい軍馬のいななきに

風に高瀬の川ほとり

そうなみたちたるももちの戦は

いづれも都勢

重田の城を救はんと

南はさせる旗じるし

道をさえぎる敵あらば

すみにしかんと進み行く

敵の大將たる者は

古今無双の豪傑で

之に従う者共は

桐野、篠原、村田など

その外兵士、二、三万、

中にも刃見十郎太

西九州で名も高かい

熊本城を囲みたり

右翼は連なる三の岳

左翼は米の岳、霜野越え

三月三日の出初めに

大砲、小砲の絶え間なく

十八昼夜の打続き

天はゆるぎて、地はさけぬ

戦の旗をとりにくれば

ときかと驚く松の風

昔ながらの山谷に

思いは永し記念石

玉東町大字山口

荒木長蔵 八十才

私が幼い頃親父が話していた事ですが：

この附近は相当激戦であった、大阪の鎮台の兵隊さんが、木の葉の大字山口の上方という所に駐屯していた兵隊さんが遊びに来て話をしていて、それは大阪を出発す

るときは熊本方面に演習に行くということであったが、

門司に着いて実弾を渡されたので驚いたと話していた。

その兵隊さんに粟餅なつとんついて、「ごちそうしょうだい」と

言つて粟餅をついてたべさせたところ、その人達が帰

つて隊の人達に話をしたのか、大勢の人達がどやどや、

やつて来たので、これは困つた、こんな大勢の人にはとて

も喰せきれないと思案していると、一個幾らかというの

で、一ヶ一文と言つと、一文とは一銭のことかと聞くが、

此方は一銭がどの位か判らないし、兵隊さんは一文とは

一銭のことかと聞く様な始末で金の価値が判らなかつた。

その後この附近に居た兵隊さんは向坂まで進撃してそ

の戦いで不利になり木葉に引き上げて来た。

そうして銃剣を研ぐやら、弾を配るやら大騒ぎだった。

弾はあるか、弾はあるか、研石はないか、研石を貸せと

大変だった、準備が終つて愈々進撃を開始し田原坂まで

行くと田原坂上方から一斉射撃を受け、高瀬附近まで退

却した。

この戦いで負傷した兵を戸板に乗せて四人で運んでいたが、薩軍に追われたので、それを捨てて現在の渡辺たばこ屋の前で逃げ出した、その中一人は現在の二〇八号



線の松永周平宅の前の排水路に飛び込み、粟穀の下にもぐり込んだので助かった。外の三人は全部殺された。その中一人は私の家の裏で殺され、一人は稲佐の宮の前（とんごん橋）で殺され残りの一人は稲佐の井上正義宅（その当時は三角屋と言っていた）ので頭を割られて死んでいた。助かった一人の処置に困ったが、結局、兵隊に行っている家がよかろうということで、梅林の浦方から兵隊に行っている人の倉庫の二階にかくまった。そのうちに南関から官軍が進出して来たので、御礼も云わずに飛び出して行ったそうである。

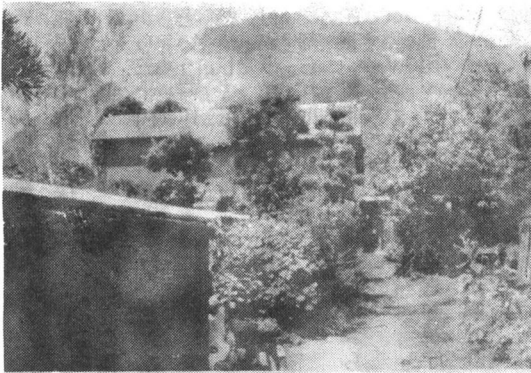
官軍は薩軍が稲佐、山口方面に居て進まれないので梅林方面に居た、官軍の一ヶ小隊位が梅林用水路の中を通って稲佐の部落に放火して引き上げ高瀬方面に退却した。薩軍は官軍の進路に当る道路で一番狭い稲佐の宮の下から八嘉の線に豪を築くのに、稲佐、山口部落から使用される物は手当り次第持ち去った。鉄でも他の物でも貸したら返さないで「だんな那さん鉄持って加勢に来ます」と云うと「うん」そうしてくれ、そうしてくれと云って喜んでいった。その当時の薩軍の服装は袴の股立ちをからげていた。そうして薩軍の勝目が見えたぞ、薩軍が勝つたら三年間は年貢はいらんぞと云っていたので百姓達は

旦那さんどうぞよろしくお願ひしますと云っていた。

一方上方（小部落の名称）の一隊が民家に遊びに来たところポーンポーンと音が聞えたので旦那さん賊が来ましたが、やがて賊が攻めて来たので上方（荒木宗雄方附近）から稲佐に通ずる返道を我れ先にと一目さんに蜘蛛の子を散らすように逃げていった。私の祖父も夫方に行っていたが逃げて帰って来た。逃げる途中、木葉の大城寺の官軍本営（高田宅）の前を通りかかったところ、大きな声で「だれか」と呼ばれたので木葉の百姓ですと言うと、百姓なら往来（本道のこと）を通れと云って陣内の道路（大城寺から揚に通ずる道）は通さなかった。土生野に出た今の高木文具店（当時はモーン山と云っていた）の附近で平尾とじいさんが、つまづいてころんだのでその音を聞いて「だるか」と唯呼されると同時に高月（現在の記念碑）の方から盛んに射撃されたので生きた気はしなかった。ようやくの思いで高月附近に来たと思うと、官軍に捕れて、何処から来たかと聞かれたので薩軍に捕われて土方に使われていたが逃げて帰るところだと云うと、薩軍の事情を詳しく聞かれたので、嘘や真実の事を適当に話していたら、「うん」そうかそうかと士官は聞

いていたが、横から兵卒が、そいつは切れ切れという、士官は切らんでもいいじゃないかといったので、命拾いをしたとほっとした、思いだった、それでは行くぞと三人の兵卒が付いて来て日本刀を「サッ」と抜いたので切られるのではないかとハッとしたが、前へ進めと号令をかけたので一応は安心した、そうして下の酒屋（坂本朝宅）まで来るとそこには村の人達が大量縛られて庭に這っていた。

（密偵の疑いで捕えられていた）自分達も縛られた、憲兵の様な者が来て色々調べて帳面に記入していた、そして明日から人夫もいるから加勢してくれと云って繩を解いてくれた。



住民が捕えられて入れられていた家

此の下の酒屋は昔は宿場しゆくだったという話だった、この庭には大きな松が何本もあった、島津さんも此処に立寄っていたとか、南関と熊本の間坂本と云う宿場がある筈だというのでおそらく此処の事だと思う。

木葉大字山口権現山の山麓に通称（幽霊山）という平たい山が在るが、この言い伝えは、賊が負傷して此の山に逃げこんで居たところ、山口の或る住民が握飯を持って行っていたが、具合が悪くなったので、その人が負傷者の懐に手を入れたところ、負傷者がその手をぐいと握って「水を飲ましてくれ飲ませたら持っている物は何でもやるから」と云い乍ら手を握って離さないので恐ろしくなったので手を引き離して逃げて来た、そうして蔭に身を秘めて生命が切れるのを見届けた上、死人が持っていた立派な日本刀や景物を持帰った、ところがその人の子供が死ぬる時剣を持ってこい、剣を持ってこいと譚語を言い乍ら死んだそうである、その後部落の人達が幽霊山と云う様になったという。

この附近でも大分激しい戦闘があった様で死体が彼方此方に散在していたが、その死体に向ってこん奴には小便しかけると云って小便をかけていたので附近は臭くて仕方がなかった。

薩軍の戦死者は新地（権現山の麓）の無縁墓地に埋葬していたが、戦後鹿児島島の遺族が探しに来て掘返して、確認の上持帰っていた、其の中の一人の死亡者の襟を探していたが其の襟から三十円の銭をみつけ、これは弟が家を出る時、いざという時に為になる様に入れておいたものだとこれを証拠にして遺骨を持帰った、そうして此処の人達は正直者ばかりで金も盗まれておらず感心な人達だとお礼を云って帰られた。

乃木少佐が赤馬に乗って走り廻って指揮しておられたが、稲佐の宮の前で落馬された。

この戦で薩軍が一番困っていたことは東京警視庁の抜刀隊であつたらしい、そこで次のような歌が唄はれた。

東京巡査と近衛がなくば、花の都え踊りこむ

当時住民は、弾丸の音がやむと、すぐとんで行つて銃とか、剣とかその他になるものがあれば持ち帰り金儲けをしていた人が大勢いたそうである。

戦の激しい時は、上方（山口部落）附近の竹に弾丸が当り「ビューン」「カチーン」と音がしてわりわり音がして竹が折れていた、そんな時は皆は家の中にはおられないので、豪の中に入って隠れていた。

戦死した者は手と足を結んで、その足の間に銃を突込

んで兎のようにして運んでいた。

田中三平さんから聞いた話だが

官軍は遠い処から来ているので非常に疲れていたの行動がにぶく、戦死傷が多かった。

或る時、浦方（稲佐の北方）の石灰小屋に賊軍の若い者が逃げ遅れていたのを官軍が発見して追つていった処、その青年は逃げ場がなくなり「石灰がま」の中に飛び込んだ、官軍は下方に廻りその青年を捕えて切った、そしてこれは若いから美味しいぞと云い乍ら股を切り取つて串に差して焼いて喰つていたという。又人の肉を炊いて喰つてたが、それに使用した鍋は泡がたつので使用しなかつた。

私の家は二俣に当時在つた物で、大正三年に移築したものであるが（現在星子さんの隣に在つた家）弾丸が表玄関の戸を打ち抜いて床柱に当たり、それで「ハリ」にささり、現在も残っている。

## 取材を終って

二月のある日、半高山に登った。

ここから西南の役の我が町の古戦場が一望のもとに見渡せる。ここで当時の戦闘状況や村人達の生活を想い浮かべながら、西南の役とは日本史にとってまた玉東町にとって、その意味、価値が何であったのか考えてみたが私にはよくわからなかった。

今は平和な眼下の山野で官、薩両軍が激突しこれを血に染め民家は焼かれ村人は帰る家もなく着のみ着のまま逃げまどい野宿をし、また穴の中で暮らし悲惨な生活を強いられ、多くの一般住民が殺された、のは事実である。村人達は、きっとかほそい息をつめながらひたすら戦いが終るのを待ち続けたに違いない。

いつの世にも戦争は地位も名もない弱い庶民を犠牲にした。大東亜戦争のときも、そうであった。

後世に生を受け、平和な世に暮らし欲しい物は金さえ出せば何でも買える現在の我々は全く幸せである。

あれから百年たった。

関係地方公共団体ではこの百周年を記念し各種の行事を計画している。

玉東町に於ても、この年にあたり、古戦場を一望できるこの山の頂きに展望台か平和祈念塔でも作ったら犠牲になつた人々の慰霊になりまた平和への祈りにもつながり、さらに云えば史書を読み郷土史を調べる人間として、こういう歴史の中に埋もれて行つた人々に対する思いやりではなからうか、とそんなことを考えながら山をおりた。

その日は粉雪混りの北風が吹きすさみ身を切るような寒い日であった。

百年前のこの日もこんな寒い日だったかも知れない。

この取材にあたり貴重な資料を提供して下さつた人々の談話を通じて多くを学ぶことができたことは私自身にとつても大きな収穫であつたし、これらの人々とのふれあひは、もはや私にとつて忘れがたいものになつた。

最後にこの取材に御協力いただいた各氏に対し満腔の謝意を表し、この取材を終りたい。

昭和五十二年三月一日

取材者

西南の役と玉東町

昭和五十二年三月 日

著者 玉東町役場助役 荒木忠雄

主事 小管敏夫

松下隆男

発行所 熊本県玉名郡玉東町大字木葉

玉東町役場

印刷所 大牟田市上官町二丁目三ノ一

森印刷所

TEL (09445) ③ 3638

